

第IV章 飯田古墳群を中心とする調査研究

1 節 調査研究略史（表2）

1. 既存資料を中心とする調査研究

飯田下伊那地域における古墳の網羅的な調査研究は、大正10～11（1921～1922）年に実施された悉皆調査で、鳥居龍蔵、小松真一、八幡一郎を指導者とし、市村威人を中心とする地元メンバーによるものである。その成果は、大正13（1924）年に『下伊那の先史及び原史時代 図版』として刊行された。昭和26（1951）年には下伊那誌編纂委員会が発足し、大場磐雄、永峯光一、亀井正道の指導を得て、測量調査等が追加実施され、昭和30（1955）年に『下伊那史』第2巻・同第3巻として刊行された。

以上は、当地域の古墳研究における基礎資料であり、さらに蓄積されたデータに基づく古墳や古墳文化に関する論考は、当地域の古墳時代研究の一つの到達点といえる。こうした調査は、馬具の出土が多いことと地域社会の生産性に注目した藤森栄一による地域史研究に活かされているが、当地域の考古学研究の対象はむしろ他の時代へと移行していく。

当地域の古墳が再び注目されるのが、長野県史刊行に伴う調査研究である。昭和53（1978）年に長野県史刊行会の中に考古資料編纂委員会が発足する。岩崎卓也を指導者として古墳の墳丘測量調査や横穴式石室の実測調査、馬具をはじめとする出土遺物の実測調査等が精力的に行われた。この中で、松尾昌彦による馬具研究（松尾 1985）は、当地域の出土馬具の実態をはじめて明らかにしたものである。また、白石太一郎による横穴式石室の論考（白石 1988）では、当地域の横穴式石室の多様性を明確にし、その背景を中央の連合的な政治体制に求めた点が重要である。こうした一連の調査研究により、特に後期の前方後円墳が盛行する地域として広く知られるようになった。

2. 発掘調査による新たな発見

古墳の発掘調査は、昭和46（1971）年に、眉庇付冑（長野県宝）が出土した松尾地区の妙前大塚古墳（円墳）の発掘調査を皮切りに、昭和50年以降は古墳を含む遺跡の発掘調査が増加する。

昭和55（1980）年に実施された座光寺地区の新井原12号古墳（帆立貝形古墳）の発掘調査で、本古墳の北側で馬具を装着した古墳時代の馬の埋葬土壌（4号土壌）が発見され、上郷地区の宮垣外遺跡、松尾地区の物見塚古墳、茶柄山古墳群等でも馬に関する遺構や馬具が確認される。以上の事例は、東国における軍事組織と絡めた岡安光彦の論考（岡安 1986）、日・韓・中の牛馬供犠事例と比較検討した桃崎祐輔の論考（桃崎 1993）、平成6（1994）年度の日本考古学協会1994年度大会で行われた馬に関わるシンポジウム等で取り上げられ（小林 1994）、馬と密接に関わる地域として広く知られるようになった。

さらに、大規模開発に先立つ発掘調査で、前方後円墳が新たに発見され、築造時期等が明らかとなった。特に、平成8～10（1996～1998）年度に、上郷単位群の溝口の塚古墳で未盗掘の竪穴式石室の調査を飯田市教育委員会が実施し、武器・武具を中心とする出土遺物から中期（5世紀後半）の前方後円墳の存在とその実態が明らかとなったことは、当地域の古墳研究にとって一つの転機となった。

以上、馬に関わる遺構・遺物の発見と、5世紀代を中心とする前方後円墳の発掘調査により、5世紀後半から6世紀初頭にかけての前方後円墳の動向がこれまでより明確に捉えられるようになった。このことは、当地域の古墳研究はもとより、古墳の保護に向けた取組をする上での契機となったといえる。

3. 飯田古墳群の保護に向けた取組

これまでの成果を受け、飯田市教育委員会では、平成17（2005）年度より飯田市域の古墳の保存活用を推進するための調査研究事業を開始した。平成17・18（2005・2006）年度には「市内主要古墳総合調査研究事業」、平成22・23（2010・2011）年度には「市内主要古墳保存活用事業」として、指導委員会の指導のもと、報告書を刊行した（飯田市教育委員会 2007・2012・2013）。一連の事業では、飯田市域に所在する前方後円墳を中心とする主要古墳を「飯田古墳群」と呼称し、その一体性や特性をより明らかにするための調査研究を進め、合わせて古墳の保護を目的とする範囲確認調査を実施した。

以上の成果と価値が認められ、平成28（2016）年10月3日に史跡飯田古墳群として指定された。

表2 飯田古墳群を中心とする主な調査等一覧

調査年（年度）	調査内容等
大正10～11（1921～1922）年	・鳥居龍藏、小松真一、八幡一郎の指導、市村咸人他の古墳の悉皆調査
大正11（1922）年	・伊那電車鉄道建設に先立つ、新井原12号古墳の竪穴式石室の発掘調査
大正13（1924）年	・『下伊那の先史及び原史時代 図版』刊行
昭和26（1951）年	・下伊那誌編纂委員会発足 ・大場磐雄、永峯光一、亀井正道の指導と協力による測量調査等の実施
昭和30（1955）年	・市村咸人編纂による『下伊那史』第2巻・同第3巻刊行
昭和41（1966）年	・おかん塚古墳の前方部（西側墳丘）横穴式石室の発掘調査（記録保存調査）
昭和42・49（1967・1974）年度	・鏡塚古墳の葺石・周溝発掘調査（記録保存調査）
昭和46（1971）年度	・妙前大塚古墳の墳丘・埋葬施設の発掘調査
昭和53（1978）年	・長野県史刊行会の考古資料編纂委員会発足
昭和55（1980）年	・国道バイパス建設に先立つ新井原12号古墳の発掘調査（記録保存調査） ・塚原二子塚古墳・代田獅子塚古墳の墳丘測量調査
昭和56（1981）年度	・座光寺小建設に先立つ北本城古墳の発掘調査（記録保存調査）
昭和57（1982）年度	・高岡第1号古墳の墳丘測量調査・横穴式石室実測調査 ・御射山獅子塚古墳の墳丘測量調査 ・おかん塚古墳の後円部（東側墳丘）横穴式石室実測調査 ・『長野県史 考古資料編 主要遺跡（南信）』刊行
昭和58（1983）年度	・集会所建設に先立つ上溝天神塚古墳の周溝等発掘調査（記録保存調査）
昭和58・59（1983・1984）年度	・姫塚古墳・上溝天神塚古墳の横穴式石室実測調査 ・御猿堂古墳の墳丘測量調査
昭和62（1987）年度	・鎧塚古墳の墳丘測量調査 ・御猿堂古墳の墳丘測量調査・横穴式石室実測調査 ・『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』刊行
平成2（1990）年度	・塚原二子塚古墳の周溝発掘調査（記録保存調査） ・『下伊那史』第1巻刊行
平成3（1991）年度	・上溝天神塚古墳の横穴式石室発掘調査（保存目的調査）
平成6（1994）年度	・日本考古学協会1994年度大会シンポジウム「馬の埋葬」開催

第Ⅳ章 飯田古墳群を中心とする調査研究

調査年（年度）	調査内容等
平成7（1995）年度	・国道バイパス建設に先立つ茶柄山3号古墳の発掘調査（記録保存調査）
平成8～10（1996～1998）年度	・国道バイパス建設に先立つ溝口の塚古墳の発掘調査（記録保存調査）
平成9～11（1997～1999）年度	・天竜川治水対策事業に先立つ久保田1号古墳の発掘調査（盛土下に保存）
平成10（1998）年度	・塚原3号古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）
平成11（1999）年度	・大塚古墳・馬背塚古墳・兼清塚古墳・権現堂1号古墳・金山二子塚古墳の墳丘測量調査
平成12（2000）年度	・鏡塚古墳・塚原3号古墳の墳丘測量調査
平成16（2004）年度	・水佐代獅子塚古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査） ・代田獅子塚古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）
平成17（2005）年度	・御猿堂古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）
平成17・18（2005・2006）年度	・市内主要古墳総合調査研究事業（指導委員会の開催、『飯田における古墳の出現と展開』刊行）
平成18（2006）年度	・おかん塚古墳の後円部の横穴式石室羨道部の発掘調査（保存目的調査） ・水佐代獅子塚古墳の墳丘測量調査
平成19～21（2007～2009）年度	・塚原二子塚古墳の周溝等範囲確認調査（保存目的調査）
平成22・23（2010・2011）年度	・市内主要古墳保存活用事業（指導委員会の開催、『飯田古墳群』刊行）
平成24（2012）年度	・主要古墳調査指導委員会委員による『飯田古墳群—論考編—』刊行
平成23・24（2011・2012）年度	・高岡第1号古墳の周溝レーダー探査、周溝範囲確認調査（保存目的調査）
平成23・26（2011・2014）年度	・代田獅子塚古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）
平成24（2012）年度	・塚原二子塚古墳の墳丘レーダー探査
平成24・25（2012・2013）年度	・羽場獅子塚古墳（前方後方墳）の範囲確認調査（保存目的調査）
平成26（2014）年度	・馬背塚古墳の周溝等範囲確認調査（保存目的調査） ・姫塚古墳の墳丘測量調査
平成26・27（2014・2015）年度	・県道建設等に先立つ北方西の原遺跡（円墳・積石塚等）・笛吹2号古墳（前方後方墳）の緊急発掘調査（記録保存調査）
平成27（2015）年度	・御猿堂古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査） ・上の坊遺跡・馬背塚古墳の緊急発掘調査（現地保存） ・飯沼天神塚（雲彩寺）古墳の墳丘測量調査 ・水佐代獅子塚古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）
平成28（2016）年度	・「飯田古墳群」として、13基の古墳が史跡指定（10月3日付） ・御射山獅子塚古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）、墳丘測量調査
平成29（2017）年度	・上溝天神塚古墳・八幡山古墳・丸山古墳の墳丘測量調査
平成30（2018）年度	・塚原二子塚古墳の墳丘測量調査
令和元（2019）年度	・姫塚古墳の周溝範囲確認調査（保存目的調査）



妙前大塚古墳調査風景（左）・眉庇付冑（右）



新井原・高岡古墳群 4号土壙（左）・馬に装着された馬具（右）

茶柄山古墳群 土壙10(上)・馬に装着された馬具(下)



溝口の塚古墳の竪穴式石室内部（北側より）

北本城古墳の横穴式石室（上が石室入口）

写真15 発掘調査した古墳・馬の埋葬土壙

2節 個別古墳概要

個別古墳の概要を示すにあたり、飯田古墳群全体の保護を念頭に入れて、史跡指定された13基の古墳だけでなく、未指定の古墳のうち現存する9基の古墳についても取り上げる。なお、史跡指定された13基については本文の巻末資料、それ以外の9基については参考資料1（CD収録）に示した。概要作成にあたっては、古墳相互の比較ができるように共通項目を設定して整理し、合わせて写真と図面を掲載した。さらに、下伊那郡喬木村に所在する郭1号古墳についても、飯田古墳群との関係が想定される前方後円墳であることから、参考資料1の末尾に掲載した。

3節 小結—飯田古墳群の歴史的位置付け

飯田古墳群は、22基の前方後円墳と5基の帆立貝形古墳を核とし、5世紀中葉から6世紀末まで連続した前方後円墳の変遷を追うことができる古墳群である。古墳群は、地形的特徴から5つの単位群（座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路）に分けられる。単位群の古墳構成や動向から、多様性をもった独自の展開を示すことに特徴がある。このことは、ヤマト王権のみならず、周辺各地域との多面的な関係性に基づく文化受容の結果であると考えられる。これまで独自性や多様性が特に強調されてきたが、馬に関わる文化の受容、墳丘や埋葬施設の構築に関わる技術的な面や埴輪製作等において、単位群相互の横の連携が存在することが指摘されている(土生田 2013、松尾 2013、田中 2013)。このことから、小地域圏を維持しながらも、全体としては共通意識を持つ一つの社会を形成していたことは明らかであり、古墳群としても一体性のあるものと捉えられる。さらに、単位群のあり方からは、現在にも繋がる地域社会が、古墳時代には形成されていたとの想定もできる。

中期中葉（5世紀中葉）は、緊迫する東北アジア情勢を背景としたヤマト王権による政治的変革期にあたる。この時期に、国内外に対する政治戦略の一環として、朝鮮（韓）半島から馬匹文化が本格的に受容された。馬は、軍事力さらには輸送力の要であり、特に陸上交通においては欠くことができないものとして重要視され、日本各地で馬匹生産が開始された。飯田市域でこれまでに確認された30基に近い馬の埋葬事例から、大阪湾沿岸部での馬匹生産開始から間もない中期中葉（5世紀中葉）という全国的にも早い段階に、馬匹生産地として成立していたと考えられる。これに続く前方後円墳の出現は、ヤマト王権と馬を介して新たな繋がりをもつことで台頭した地域としての姿を反映している。

馬匹文化がもたらされた背景として、当地域が西と東とを繋ぐ内陸交通の要衝、東国における重要な拠点として位置付けられたことがあげられる。このことは、当地域が律令時代における東山道の経路上にあり、神坂峠という交通の要所を擁した地域として、東からの人やモノのチェック機能をもった中継地であったことにも繋がる(桐原 2013)。内陸部での馬匹生産は、前期以来の海上交通や河川交通から陸上交通へと大きく移行する上での原動力となったと考える。このような交通網の変化は、特に東国以東における政治的・社会的変革の一要因であり、飯田古墳群の成立は時代の大変革を如実に示している。

飯田市域では、横穴式石室が導入される後期（6世紀）になると、小地域を単位とする古墳築造に変化が生じる。後期後半には前方後円墳築造が松尾・竜丘単位群へと収斂するが、後期末には前方後円墳築造自体が終息し、7世紀以降は権力表徴が寺院へと移行する。こうした状況は、畿内の動向とも軌を一にするもので、ヤマト王権の東国経営戦略にとってさらに重要な地域として、その関係性が強化されたことを示している。

以上、飯田古墳群は、神坂峠を控えた陸上（内陸）交通の要衝にあって、畿内と東国における陸路の出入口として、馬匹生産とその管理を担い、ヤマト王権の東国経営の一拠点であったことを示すものである。本古墳群の特徴である限られた範囲に、前方後円墳が突如として出現する群としての「一体性」と、石室構造や出土遺物にみられる「多様性」や「独自性」からは、当時のヤマト王権による統治の一方で、地方在地勢力による統治（自治）が共存していたことを反映している。このように本古墳群は、中央集権国家成立前夜の中央と地方との関係を、地方の視座から捉えることができるものである。